
Decorative Death

灰色のジアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D e c o r a t i v e D e a t h

【Nコード】

N 0 2 3 0 U

【作者名】

灰色のジアン

【あらすじ】

虚飾の館に取り残された姫と探偵、その対峙。

イヴは真つ赤な口紅を引いた。鏡の中の姫の、美しい死に化粧。それを視て、微笑む。そうして待っていると、ドアの隙間から小さなカードが差し込まれた。

今夜十二時、第二ホール。

タイプライターで書かれた短い文章。差出人の名前は書いていない。イヴはもう一度だけ文面を読み返してから、衣擦れの音だけを残してドレッサーを去る。

一体、自分の他に誰が残っているというのか。この館の人間は、皆、イヴが殺したのというのに。

誰もいない廊下の中央を歩く。最後の殺人を犯した第一ホールから遠ざかり、食堂へ。パーティーはここで幕を開けた。イヴはシルクのテーブルクロスに指先を走らせながら、通り抜ける。

第二の殺人をした客室を横切り、らせん階段を上る。小さな銃眼窓から外をのぞくと、強い雨が降っている。しぶきの彼方に、崩壊させた吊り橋が見える。

足音だけが響いている。

第二ホールの扉の前に立った。館はシンメトリー構造で、第二ホールと第一ホールは瓜二つである。館を東から西へ歩いただけであるが、あたかも自分が粛々と達成した連続殺人を回顧するかのような順路であった。イヴは感慨にふけていた。この扉を開けると、その感慨が驚きによって破られる。それを知ってはいるものの、そっと扉に手をかけた。暗い廊下に、金色の光が差し込む。イヴは目を細めながら入室する。

一面に広がる真紅の絨毯の上には、呪いの魔法陣、分厚い本のドミノ、ランプシェード、甲冑、氷、水銀、ピアノ線。イヴが仕掛け

た殺人装置の全構成要素が浮遊していた。

ドアを開けた次の瞬間からそれらが作動し、ホール中央に配された人形に槍を突き立てた。探偵の手によって、ミステリーが再現されたのだ。

静まり返る室内に、イヴは拍手喝采を送る。応えるように影が揺らめき、倒れた甲冑の中から、探偵が現れた。探偵は器用に鎧を脱ぎ捨てると、深々と一礼した。

橋から落ちたはずの探偵である。イヴは少し驚いた。

「生きていたのね」

「はい」

探偵は笑う。イヴは気に食わない。それでも、冷静さを装うには十分な知性を、彼女は持ち合わせていた。

「どうして、とは訊かなくてよ。貴方は探偵。探偵が犯人より優れているのは世の常ですわ」

イヴは人形の周りをゆっくりと歩きながら語りかけた。

「第四の殺人も観てくださったのね。トリックはいかがでした？
難しかったですか？」

「いいえ。恐れながら、難しいとは思いませんでした」

「そう。……私が犯人ということに対しての感想は？」

「それも、別に。依頼人が犯人ということも往々にしてあることですし、ただ」

「ただ？」

「貴女は僕に、助けて欲しいと依頼されましたね。その依頼を、僕は果たせたのでしょうか。そしてその報酬は頂けるのでしょうか？」

その二点だけが心配です」

「そうね」

イヴは髪を弄りながら考える。

「後者については、そのピアノを差し上げますわ。それが貴方への報酬。音楽は良いですよ。永久機関に最も近い存在。音楽の中の喜びは無制限です」

探偵は黙っていた。不服なのだろう。ピアノは、ピアノ線を抜かれて壊れているのだ。

「前者については、そうね。助けてもらったわ。貴方には概ね役割を果たしてもらいましたから」

「概ね、と云いますと」

「まだ最後の仕事が残っています。それが出来たらこの館の全部を差し上げますわ。……さあ、私を説得なさい。犯人であることはここで認めます。次はどうしてこんなことを、と訊くのですよ」

探偵はしばし不愉快を露わにしながらも、次のように返す。

「どうしてこんなことを」

「私はたまらなく嫌だったのです。生きていることが」

イヴはピアノの椅子に腰かけ、続ける。

「もつとも、ロジックがある人ならば、生という状態がどれほど異常で、どれほど恐ろしいものか分かりそうなものです。生には苦痛が多すぎます」

探偵は黙って聞いていた。

「でも彼らは生から目を反らし、私を寵愛することで、苦痛から逃げていたのです。私が死ぬためには、彼らを殺すしかありませんでした」

「死ぬことに許可が必要とは、僕には思えませんね」

「ええ。もちろん彼らの許可など要りませんよ」

イヴは微笑む。

「でもそれでは納得がいきません。彼らには苦しい生、そしてそこからの死を味わってもらわない事には、私と対等にならないのです」
ホールの天井には壮大な宗教画が描かれている。イヴはそれを見上げながら続けた。

「私は天使でも悪魔でもありません。中立たる人間です。彼らを救うつもりも、過剰に苦しめるつもりもありません。差し引きゼロにしただけのことです。尽くした分だけは返してもらうのです。貴方もそういう仕事をしているでしょう？ ロジックのみに忠実という

ことは、機械的なように見えて実は、とても人間らしいと云えます」
「そうかもしれません。でも、そういう話は、僕にはよく分からない。僕に分かるのは、自分の役割……。それと、それを全うする必要知識があるだけです」

探偵は哀しげに云った。ざあざあという雨の音だけが二人を包み込んだ。

「そう……。分からなくて、良いですよ」

イヴは云う。

「人間とは所詮、分かり合えないものですからね。分かり合えないことを証明するために、私と貴方はいるのかもしれませんが」

イヴは両手を広げた。少し気分が悪くなってきた。そろそろ時間だ。

「いらっしやい、探偵さん。私が殺して差し上げます。さあ、私にキスをするのです。それが貴方の最後の役目です」

言葉がホールに吸い込まれていく。それは魔法のように作用し、探偵は目の色を変えた。

「ああ、僕は貴女に殺されるためにここに来たのか。いや、貴女を救うためにここに来たはずなのに……」

探偵はうわ言のように呟く。そしてマリオネットのようにたどたどしい足取りで、イヴのもとにやってきた。イヴは真っ赤な口元を歪めて笑う。

と、次の瞬間、探偵はおもむろに恭しく跪き、イヴの白く細い手を奪い取って、そこに唇をあてがった。

そして顔を上げ、にやりと笑った。瞳は澄んだ青い色をしていた。

「貴方って、とても紳士的なのね」

イヴは憎しみを込めた眼差しを送る。

「こういう探偵とは、紳士なものです」

その言葉を最後に、探偵の姿は跡形もなく消えていた。

どうせ私が死ねば、貴方も消える。無駄な抵抗よ。でも、
「くやしいわね」

イヴは呟く。

探偵さん。貴方とキスして、一緒に死にたかったわ。それって、私にとって最も美しい生と死だとは思わなくて？

でもこういう虚無感も、甘美だわ。

「一人用になってしまったわ」

イヴは猛毒の付いた下唇を噛み、息絶える。

人は分かり合えない。

自分の理論すら、揺らぐ蜃気楼に過ぎないというのに、どうして他人を理解などできようか。ホールの床に投げ出された四肢から、意識の残滓が広がってゆく。

脳が進化しすぎたのだ。気付くべきでないものに気付くほどに。自ら巨大な世界を作り上げてしまうほどに。それを壊したくてたまらないのに、壊すことができない。生に絶望しながら、いつも死を選び損ねる哀れな動物。でも、ロジックはもう終わり。事実だけが館に残された。

ただ、イヴと探偵は、デコラティヴに生き、そして死んだ。

END

(後書き)

いかがでしたでしょうか？

この作品は特に、やりたいように書いてだけで、僕はこういうのが好き、という自己紹介みたいなものです。期待してくれた人には、ごめんなさい。

お口直しになるかどうかはともかく、他にもいろいろ書いていますので、よければ、そちらもご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0230u/>

Decorative Death

2011年6月12日14時55分発行